

## 中野市教育委員会指定文化財候補 調査票

調査年月日 平成 20 年 1 月 15 日

調査者氏名 涌井 二夫

- 1 種別 有形民俗文化財（石造文化財）
- 2 呼称 釜上地蔵かまうえじぞう
- 3 所在地 中野市桜沢字窪山
- 4 所有者又は管理者 中野市桜沢区
- 5 内容

## 【由来・伝承】

『釜上地蔵』は、桜沢区で管理奉伺している地蔵尊である。

石造の地蔵尊で、像形は丸彫坐像。総高 105cm、尊高 53cm、幅 41cm、厚さ 15cm。

銘文は台正面に「奉造立□□」と読み取れるが、造立者、年代、趣意などは不明。

また、釜上地蔵尊は『むかし、桜沢の人たちは、天地の恵みに感謝しながら楽しくくらししていた。ところが、ある年、邑にコロリ（コレラ）が大流行して多くの死者が出た。その死者をムラはずれの窪地に運び火葬した。その上に安置したのが、釜上地蔵である。そののち、だれ言うとも無く、この地蔵尊を信仰すれば悪病が流行しないと、お参りするようになった。そしていつのころであったか邑中この像を担ぎまわって祈願したので、悪病はいつさい邑には進入しなくなったという。また、いつのころからか、せんべいを一枚お供えすると、お産や夜泣きにご利益があるといわれるようになった。

このお地蔵さんには、毎夜真引川の竜神さんが来て、灯火をあげているといわれている。

その灯火の明かりは遠方からは見えるが、近づくとも見えないので、桜沢の人たちには見えないと云われている。』<「中野市文化財調査報告書 第2集」>という伝承がある。

このことから地蔵尊造立の趣意は、流行病のコロリの犠牲者を葬った供養地蔵であったことがうかがえる。

また、伝承のコロリが流行した記録から推測すれば、享保年間（1716～1734）は全国的にコロリの流行った時期であり、当地区でも享保2年から7年にかけて連続洪水の被害に見まわれ、享保4年ころ疫病が発生して桜沢でも多数の死者が出、窪山の山腹の窪地で茶毘にふしたと伝えられている<釜上地蔵尊記大正7年記録>。このことから推測して、その後供養のために造立した地蔵尊であり、享保7年前後の造立の地蔵尊であることを推察してもあながち的を外れるものではないと考えられる。

なお、死者を茶毘にふしたとされる窪地と、地蔵尊が祀られている場所は数百メートルの隔りがある。また「S家のご先祖さんの夢枕にお地蔵さんのお告げがあり、お地蔵さんを掘り起こして祀った」という話も伝わっているが、始めから現在地に建造されたものか、当初祀られた場所（窪地）にあったものが後世現在地に移転されたものか、その時期はいつ頃であったか等は不明である。

## 【信仰・祭りの姿】

釜上地蔵尊の縁日は9月24日。毎年この日は地区や近隣の参詣者で賑わう。

前夜、当番地区（南沢・田端・中ノ沢・会下沢えんげさわの4常会持ち回り）でお寺さん（大熊：龍水寺）に来てもらって法要をし、茶碗酒で御齋をする。

また、地蔵尊お札刷りをし、縁日当日桜沢区全戸と参詣者に配る。お札はお勝手の竈付近に貼っておく。版木は区長保管で引き継がれている。

縁日当日、当番地区各家では団子（米の粉：ジョウシンコ）を一重箱つくり持ち寄って、参詣者に御供として配る。この「団子を食べると病気をしない」と言われている。

また、子どもの夜泣きや病氣平癒の祈願をする人や平癒お礼参りの参詣者は、焙烙ほうろくで焼いたせんべいを供える習俗がある。

地蔵尊は県道中野小布施線の山裾にあり、道ゆく桜沢地区や近隣地区の人は、頭を下げたお参りして通る人も多い。

6 保存の状態

石像の状態はよい。また区民の総意により、平成 11 年度中野市農業集落活性化事業の補助金で、地蔵尊蓋屋の新築改修をし、石仏の劣化防止に役している。

地区老人会が 1 回、地区役員会が 1 回、当番常会が数回出役し、草刈・清掃などの環境整備にあっている。

7 保護指定についての調査者の意見

上記の理由により、中野市有形民俗文化財（石造文化財）候補として推薦したい。ただ指定にあたっては、地区のコンセンサスを得て行なうことが好ましく、当該地区との合意形成に配慮して行なうように努められたい。

□ 写真



## 中野市教育委員会指定文化財候補 調査票

調査年月日 平成 20 年 1 月 15 日

調査者氏名 涌 井 二 夫

- 1 種 別 有形民俗文化財（石造文化財）
- 2 呼 称 北村のお地藏さん
- 3 所在地 中野市豊田大字上今井字荒山
- 4 所有者又は管理者 神田文忠さん
- 5 内 容

### 【由来・伝承】

地元の人たちが『北村のお地藏さん』と呼ぶ石造地藏尊は、荒山地籍の北、豊井小学校の南の旧飯山街道に通じるムラの古道の傍らにひっそりと佇んでいる。

明治 30 年（1897）ころ、県道工事のため現在地に遷されたと伝えられている。

石造の地藏尊で、像容は丸彫の合掌形地藏尊立像。総高□□cm、尊高□□cm、幅□□cm、厚さ□□cm。

地藏尊背面に次の銘文がある。

「寛保弍壬戌秋八月朔大水陸地成江者五日漂流而以萬計、是於牟礼駅袖山氏者咄嗟之心頓生則石工為鳩創地藏菩薩之尊像以安置千曲の西畦之建 請余名以日 六道能化 至今不休使彼逝者 頓出迷流」とある。（前中野市文化財保護審議委員小林修一氏解説）

荒山は、立ヶ花狭窄部から抜けて大きく蛇行し、ゆるやかに流れる千曲川に近い川辺の集落で、水難事故の多い地籍であった。

背面銘文から、寛保 2 年（1742）の大洪水で、この荒山の船場（通船の船つき場）付近で漂着者となった犠牲者を弔うため、袖山氏の発願によって建立された地藏尊であることがわかる。

### 【信仰・祭りの姿】

近隣・地区の人たちもこの地藏尊の趣意を知る人は少なく、今は祀る人が誰であるかもわからないといった状態である。

神田文忠氏の敷地にあり、同氏の管理祭祀する屋敷神と理解している様子である。

- 6 保存の状態

野ざらしの石造地藏尊で、石像の劣化がやや進んでいる。背面の銘文も読み取りにくくなっている。

- 7 保護指定についての調査者の意見

「戌の満水」という歴史的事実を記録した地藏尊は貴重である。

上流各地にも同類の地藏尊があるが、それらは今日では地区で管理祭祀され、説明板等を設置し、後世に歴史の証言者となっている。

川辺に住む人たちは、このお地藏さんに託した水除けの祈りは今日でも生きつづけていると思われるが、すっかり忘れられ風化している。

しかし水への深い祈りは、歴史の事実を直視し、伝えることから生れ意義をもつものであろう。

そういう意味で、地区・所有者に十分等地蔵尊の意義を理解してもらい、保存に尽す意義は大きい。

□ 写真

